

市丸ギン 神殺鎗が最
強だと信じている

神谷佑都

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作の最初、まだほぼ隊長たちがでてきたばかりのあたり、朽木白哉の前に市丸ギン
と更木剣八が話していた時、一瞬のうちに更木剣八をぐるぐる巻きにして誘拐してしま
う市丸ギンが弱いはずがない。

更木剣八が、市丸が斬り損ねた黒崎一護を斬つてみてえと評価する市丸ギンが弱いは
ずがない。

とんでもないスピードで死神になつた実績と天才少年と呼ばれた市丸ギンが弱いは

ずがない。

藍染隊長が見込み、実質N.O. 2のポジションの市丸ギンが弱いはずがない。
氷雪系最強の日番谷隊長がブチ切れててもギリギリまで遊んでしまう市丸ギンが弱いはずがない。

虚化できるひよ里を瞬殺してしまう市丸ギンが弱いはずがない。

実質、藍染隊長を殺していくほど追いつめた市丸ギンが弱いはずがない。

市丸ギンが最強。超好き。

神殺鎗が最強。超好き。

ただそれだけの思いのもとに書きなぐつたのであらすじなどない。

目

神殺鎗の能力

元三番隊隊長の能力

次

7 1

神殺鎗の能力

「見したる。いくで。今度は手加減なしや」

市丸ギン。元三番隊隊長を務めていた男が、斬魂刀を構える。反逆の大罪人である藍染惣右介のもと、黒崎一護へとその凶刃を向けていた。

「卍解 神殺鎗（かみしにのやり）」

市丸ギン自身から靈圧が爆発的に膨れ上がる。もともと彼の斬魂刀である「神鎗」の特性を知っていた黒崎一護は、間合いの外からとはいえ、最大の警戒心で相対する。それでも、市丸ギンが脇差ほどしかない短刀を振るうと、空座町を模した町並みの高い建物が一瞬のうちに真つ二つとなつていた。伸縮の特性を有する神殺鎗は、その圧倒的な靈圧をのせた刃で黒崎一護へと斬り込んだ。

「……っ」

氣味の悪い子やと称した笑みを崩し、市丸ギンは目の前の光景に少々驚かされたようだ。黒崎一護もまた、自身の有する卍解「天鎖残月」である黒刀で対抗する。少しでも判断を間違えれば、首を持つて行かれたであろう一撃を見事に押し留めたのである。

「何驚いてんだよ。同じ卍解で止められねえわけねけだろ」

黒崎一護はお返しとばかりに剣戟を振るう。大きく刀の間合いから繰り出す攻撃を市丸ギンに向けて放出した。あっさり止められたことで、わずかばかりに市丸ギンも反応が遅れたようだ。細く鋭利な眼を見開きながら、致命傷だけは避ける。再び市丸ギンは黒崎一護を称する。傷を負い、赤い血を流しながらも、まだまだ余裕を見せつける。裂けるように口元で弧を描いた。

「何や、やっぱり、気味の悪い子や」

間合いの外からであれば、黒崎一護は冷静に対処する。難儀なことだと市丸ギンは戦い方を一考する。ただ闇雲に放つのではなく、隙を生じさせようと距離を詰めることにした。考えてみれば、黒崎一護とも卍解の特性が非常に似ている。他の隊長たちのように大規模な卍解の形を成していない。朽木白哉に言わせれば、非常に矮小な卍解同士である。

(お互い戦い慣れているか……)

ならばと、逆に短い間合いで切り結び、隙を生じさせることにした。だが、意外にもこれにもついてくる。そして、神殺鎗が折れるのではないかという軽口にも付き合えるほど、黒崎一護にも余裕があるようだ。

市丸ギンもより深く笑みを浮かべる。ならばこれならどうだろう。攻守が素早く入

れ替わることは戦いの中ではよくある。だが、間合いが素早く入れ変わるならどうだろ
うか。

後退して距離を取る。その瞬間に神殺鎗の能力で刀身を伸ばして刺突を繰り出す。
そのまま、刀を振り下して斬撃への第二撃を加えた。黒崎一護は対応しただけでなく、
むしろ反撃の隙を狙い、逆に間合いを詰めてきた。黒刀をしつかりと神殺鎗で防ぎ、一
度仕切り直しとなるが、黒崎一護は何と神殺鎗の能力に気が付いた。

神殺鎗の能力。それは、間合いの外からでも攻撃ができる13キロというリーチでも
なく、ビルを一瞬で真つ二つにする攻撃力でもなく、即座に伸び縮みする伸縮の速さだ
と、黒崎一護が見抜いた。

「教えといてあげる。今の五百倍や」

「……!?

神殺鎗の伸縮の速さは音速をも超えると市丸ギンは主張する。能力を見抜いたとこ
ろで勝ちの目はない。当然である。神殺鎗の能力で恐ろしいのは伸縮の速さではない
のだから。

黒崎一護と市丸ギンの戦いは続く。余裕がある市丸ギンと違い、黒崎一護は攻めあぐ
ねていた。伸縮の速さが恐ろしいと考えるとしても、圧倒的にリーチに差があるのも厳

しい。黒崎一護は一度、ビルを真つ二つにした瓦礫に一旦身を潜め、作戦を考える時間 を設ける。

「何や。かくれんばか。享楽隊長みたいなことするんやね」

姿の見えなくなつた黒崎一護を探すため、市丸ギンは落ち着いた様子で周りを見回した。

「うるせーつてんだ。こつちは作戦会議中だ」

「でもまあ無駄や」

「……っ!?」

二人が戦つた形跡で、瓦礫が周りには散らばつている。黒崎一護がどこに潜んでいる かなど、ただ見回しただけでは分からぬはずだが、市丸ギンは正確に黒崎一護が潜む 瓦礫に向けて神殺鎗を向けた。伸びた刀身は瓦礫であろうと粉々に碎いてしまう。本 来の神殺鎗の威力に加え、瞬時に伸びるスピードが上乗せされているためだろう。い や、それよりもなぜ居場所を見抜かれたかである。

「ちつ……」

黒崎一護が舌を打つ。獲物を狙う殺気に感付いたため、何とか難を逃れたようだ。

「何で分かつたんだ」

「そんなん簡単や。君の震えるような呼吸が聞こえたからや」

「なんつ……だと」

黒崎一護がぎりっと歯噛みして市丸ギンを睨む。呼吸が聞こえたわけがない。とうより、俺がビビつてゐるわけねえと怒りを露わにしたのだ。

「嘘や。そんなんこの距離で聞こえるわけないやろ。ボクの神殺鎗、どれくらい伸びるか言つたん覚えてる?」

「……覚えてねえ」

「嘘ばっかり。しやあない、もう一度言うで。13キロや」

「……」

「けどよく考えてみたら、そんな距離にいる相手、ボクには見えへん。声も聞こえへん。……仕留めたかどうかも分からへん

「……何が書いてーんだ?」

改めて敵に自分の辻解の能力を言う必要性が分からぬ。黒崎一護は、これにも何が意味があるのかと慎重に警戒心を強めていた。

「死神は皆、靈圧知覚つていうんを持つてるんや。靈圧だけで相手だつたりいろんなもんを感覚として認識することができる。これがあれば、たどえ見えない相手でも戦うことができるんや」

「……まさか……」

市丸ギンの言わんとしていることを察する黒崎一護は、目を見開いて驚愕する。
「ボクの靈圧知覚も、13キロや。たとえどこに逃げても、ボクからは逃げられへんで」

元三番隊隊長の能力

「くそつ！」

神殺鎗が襲う。黒崎一護はかろうじてその攻撃から逃れる。何て能力だ。じゃあ、半径13キロ以内だつたら、全部あいつの手の内つてことじやねえか。

黒崎一護は、神殺鎗の恐ろしさが伸縮の速さだけではないことに焦りを感じる。見えないところでも感知できるとなると、全く隙がない。逆にそれは、市丸ギンに死角がないともいえる。

神殺鎗をギリギリで避わして攻撃に転じる。またもや受け止められてしまつたが、黒崎一護はチャンスを見出そうと、頭を回転させた。動じるな。残月のおつさんも言つていた。退けば老いるぞ。臆せば死ぬぞ。

一瞬の隙を狙つて刺突が飛んでくる市丸ギンを相手に、それこそ一瞬でも気が抜けない。黒崎一護は自分を奮い立たせた。と同時に、少なからず付け入る隙を黒崎一護は見出そうとしていた。

（奴の正解は確かにやつかいだが、切つ先にさえ集中していれば……）

どこかでカウンターを企む黒崎一護だが、その策略をあざ笑うかのように、黒崎一護

の眼には光り輝く六本の鎗が映つた。

「なつ……」

「縛道の六十一、六杖光牢（りくじょうこうりょう）」

「がつ……くそつ……」

市丸ギンの指先から放たれる鬼道。朽木白哉が得意とする鬼道であつた。

「鬼道使えたのかよつ……」

「ボクも隊長やつてんから、もしかしたら使えるかもとは思わんかつたん？」

市丸ギンの言う通りだと黒崎一護は自分の甘い考えに歯噛みした。六杖光牢は動きを封じる鬼道だ。超スピードを身に付ける天鎖残月にとつては天敵であり、間合いをものともしない神殺鎗とは相性の良い鬼道だつた。

「少しはやるかと思つたけどこんなもんか。最後はあつけないけど、これで終いやね」

市丸ギンが鬼道を使役したほうとは違う右手の斬魂刀を、黒崎一護に刃先を向ける手

前、黒崎一護は最後の力を振り絞り、一瞬だけ仮面を出して六杖光牢を打ち碎いた。

「へえ、抜け出したんや。上手なもんや。けど、それえらく体には負担かかるみたいやで」

「はあ……はあ……、うるせーよ」

出した仮面をすぐに消すことで、体の消耗を最低限に抑える。だが、市丸ギンを斃す

には、やはり仮面の力を借りなければ勝てないと黒崎一護は悟る。せめて市丸ギンの隙を作らなければ……。

「月牙……」

「無駄や。やめとき」

「てんつ……な、なんだ……？」

市丸ギンに言われてやめたわけじやない。黒崎一護は間違いなく月牙天衝を放とうとした。だというのに、斬月から放つために集約させた靈圧が消えてしまつたのだ。

「いつたい、どうなつてんだつ……」

「だから言うたやろ。やめときつて」

「てめえが何かしたのかつ」

「人聞き悪いで。まあ、君がその技使えんかつたのは、確かにボクのせいなんやけど」

「くそつ、いつたい何したんだ」

黒崎一護は飛び出す。まだ高校生で未熟なゆえ、感情のままに飛び出したのもあるが、月牙天衝を封じられたとあつては、市丸ギンのように間合いの外からの攻撃手段がない。黒崎一護は距離を詰めて、白兵戦を挑むしかなかつた。

「ずっと気付かへんかったん？ 分かつてたから、その月牙を撃たんねやどばつかり思

うてたんやけど

「こつちは何したつきていてんだ」

かつて丹坊の腕を切り落とした時のように、黒崎一護は市丸ギンに臆することなく立ち向かう。

「これがボクの神殺鎗の能力や。13キロにいるうちは、ボク以外は皆、靈圧を封じられる」

「何……だと……」

「実際きいてもピンとけえへんやろ。つまり、君は今、月牙も鬼道も使えない状態にあるや。けどその超スピードは靈圧とは関係ないから使える。安心しいや」

「くそっ」

神殺鎗の基本攻撃である刺突が黒崎一護を襲う。超スピードは単解の能力として確かに機能している。だからこそ、かろうじて神殺鎗に何とか対応できている。

分が悪い。逃げるわけにはいかないが、一旦立て直さなければ。

『滲み出す混濁の紋章』、『不遜なる狂気の器』、『湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる』、『爬行する鉄の王女』……

「なつ……」

『絶えず自壊する泥の人形』、『結合せよ』、『反発せよ』、『地に満ち……』

「させねえ!?」

月牙天衝が使えなくても虚化は使える。藍染惣右介が使っていた九十番の鬼道。黒崎一護が詠唱で判断がつくはずもないが、周りの空間を黒く沈んだ闇が覆い始めるのを目にして察知する。これはかつて、藍染惣右介が七番隊隊長、泊村左陣に向けた使用した“黒棺”である。

虚化して瞬時に市丸ギンに刃を向けた。詠唱をやめ、黒崎一護の攻撃を止めることに切り替えると、黒く濁つた空間は徐々に融解してその姿を顕現することはなかつた。

「この……」

仮面の奥に潜む黒い眼が、まっすぐに市丸ギンを射抜く。まるで射殺すように突き刺さる視線を浴びて、市丸ギンはその鋭利な碧き眼を僅かに見開いた。

「あかんなあ。やつぱり、愛染隊長のようにはうまくいけへんなあ」

藍染惣右介は扱いが難しい九十番を詠唱破棄で使用していた。だが、不適に笑うこの蛇のような男もまた、底が知れない。神殺鎗の真の能力が“毒”であることが判明するのは、この男が愛する者のために、藍染惣右介へと反旗を翻すのが最初のことである。